第１回　こんぜの里周辺施設のあり方検討委員会　議事要旨

日　時	令和４年１２月１日（木）　午前９時３０分～	
場　所	栗東市役所２階　第１会議室	
出席者	【委員】	高橋　卓也　滋賀県立大学　環境科学部　教授 加藤　恵里　滋賀県立大学講師 澤　幸司　金勝生産森林組合より推薦 宮城　定右衛門　明日の走井を考える会より推薦 玉木　圭介　滋賀南部森林組合より推薦 田中　義信　一般社団法人栗東市観光協会より推薦 吉永　義則　市民代表
	【事務局】	
欠席者	【委員】	－
次　第	１．開会 ２．あいさつ ３．委員委嘱 ４．委員自己紹介 ５．委員会設置要領について ６．委員長・副委員長の選出について ７．協議事項 （１）こんぜの里周辺施設のあり方検討の目的 （２）こんぜの里周辺エリアに関する現状整理 （３）こんぜの里周辺エリアの施設に関する整理 （４）こんぜの里周辺エリアの施設に関する課題整理 （５）こんぜの里周辺エリアの方向性検討 ８．その他 （１）連絡事項 （２）次回の会議日程について ９．閉会	

１．開会

２．あいさつ

・内藤部長によるあいさつを行った。

３．委員委嘱

・内藤部長より委員の委嘱を行った。

４．委員自己紹介

・各委員及び事務局より自己紹介を行った。

５．委員会設置要綱について

・事務局より要綱の説明を行った。

６．委員長・副委員長の選出について

・委員からの推薦により高橋委員を委員長に選出した。

・高橋委員長の指名により加藤委員を副委員長に選出した。

７．協議事項

（１）こんぜの里周辺施設のあり方検討の目的

（２）こんぜの里周辺エリアに関する現状整理

・事務局より資料説明を行い、こんぜの里周辺エリアに関する現状整理に関する委員の意見を頂戴した。

・以下、主な意見。

高橋委員長：非常にコンパクトに、こんぜの里周辺についてまとめていただいた。実際にどの程度の人数の来訪があるのか、また各施設の現状についても説明していただいた。

宮城委員　：甲賀市からの来訪が多いというのは、どういうことが考えられるのか。

事務局　　：現段階で、甲賀市からの来訪が多い原因までは分析できていない。ただ、別の年で同様の調査を今年度中に実施するため、その結果も踏まえて分析したいと考えている。

事務局　　：今回の調査で実施した人流データは、本事業の検討支援を委託している事業者と携帯電話会社のソフトバンクが連携して行っているビッグデータを用いたものである。調査結果の課題と認識している点として、こんぜの里周辺に基地局が少ないという点が挙げられる。ただ、甲賀市からの来訪が多いということにはかわりない。もしかすると森の未来等の宿泊状況が影響している可能性があるので、別の時期で同じようなのを取ってみて、実際どうなのかというのは検証する予定である。

宮城委員　：単に通過している交通と実際の立寄りは区別できるのか。

事務局　　：こんぜの里周辺に 15 分以上立ち寄ったという人だけをピックアップしているので、通過交通との仕分けはできている。

宮城委員　：了解した。

田中委員　：今ソフトバンクのデータを使われているとのことだが、au や docomo 等ある中で施設の動向を把握することは可能なのか。

事務局　　：ソフトバンクのデータをもとに、補正をかけている。

田中委員　：ある程度の時間に分けて（昼夜なのか。土日なのか）、分析していかないとなかなか見えてこないのではないか。

事務局　　：ご指摘のところもあると考えている。今回の調査では、2019 年の 1 カ月間の平均で取っているため、詳細な分析はできないということはある。

田中委員　：あり方検討の目的であるが、「地域資源を有しているものの県内自治体の中でも観光

入込客数及び観光消費額が低い」とあるが、栗東市として低いということ、このことに対して観光をうまく生かしていないからできてないというのか、そもそも論として栗東市は観光振興をどのように捉えているのか。

我々は、若い人たちがずっと住み続けたいとか、リーディング産業を起こす等は、そもそも地域振興であり、地域にお金を落としていただく、地域の方々がそこで雇用が発生し、そこで若い人たちがずっと住み続けたくなるという地域振興につなげていかなければいけないと考えている。

市として観光振興ということをどのように捉えているのかを聞きたい。観光消費額が低いということがいけないということ、こんぜの地域が活性化していないことのほうが問題なのではないか。その連携とかどのように考えているのか聞きたい。

事務局　：竹村市長の思いとしては、交流人口を増加させたいという思いがある。金勝山の再整備に取り組んでいきたいということをおっしゃっており、県外のみならず、当然地域の人もここに移り住んできていただくための魅力も発信したいと考えている。

田中委員　：観光は手段・ツールである。観光客を増やすのが最初の目的ではないということを言いたかった。その中で我々は、市民体験交流センターの魅力をどうアップするか考えており、究極の目的どこにあるのかはっきりさせていただきたいということでご質問させていただいた。

澤委員　：観光振興は地域振興だという言葉は大変いいと思う。やはり地元に若い世代が住み着かないと、なかなかグレードアップしていかない。だから、究極のところは地域振興にある。奥こんぜの振興に結びつけていくような方向性を作っていただくとありがたい。

吉永委員　：このテーマの委員会の名称は「こんぜの里」ということで柔らかい表現になっているが、漢字の金勝と使い分けをしているのは、子ども向けも含めたイメージで作ろうとしているのではないかと感じた。

そして、自然がいっぱいという特徴があるが、その中で子どもが虫取り行うというイメージの里山的なイメージでやり、ゆったり遊べるようなところを作る。私としては頂上付近に平地を作って、見晴らしのいい場所で一望できるような高台に平場を作るとか、何もなくても憩える場所みたいなものを作っていく方向を考えたらどうかと思う。また、道路についても、危険性の高い曲がり角がたくさんあったりするので、その辺のところを整備していったらもう少し来るのではないか。

宮城委員　：もちろん景色のいいところは必要と考えられるが、今ここでお金をかけて、どんどん広場を整備するのは、今の時代にあまりそぐわないのではないかとにも感じる。

馬車に乗れる（20 分程度）といったものを観光の 1 つの目玉として、こんぜの里に行くには馬車でないと行けない、こんぜの里に行けば馬に乗れる、等が実施できないか。売上は乗車券によってカバーできるのかと考えている。

田中委員　：秋祭りとして、日産リーフの森で何年間か市民秋祭りをやっていた。日産リーフの森を全面的に使用し、コンサートや各種イベントを実施した。コロナ等の関係もあり、リーフの森が活用されていないという状況がある。ちょっとしたことで魅力を

発信できるところはあるのですが、そういった場所があるということを PR する必要がある。道路が危険だということは認識している。現在は、コロナの影響でバスの運行はしていないが、道路が整備されれば、自家用車での来訪が増えるのではないかと考えている。

澤委員　　：各施設が老朽化し様々な問題・課題を抱えているため、各委員がおっしゃるように、何とか目玉となる、核となる施設を考えていかなければいけないと思っている。そういった点で民間事業者のノウハウを活用すべきではないか。ただし、市の施設であるため、当然市の条例等のハードルがあると考えられることから、なかなか思い切ったことができないと想定されるが、民間主導でやればもっとうまく運営してくれると思う。

玉木委員　：大津市と比べるとインフラとしては恵まれているエリアではないかと考えている。宮城さんがおっしゃった馬車というのも十分実現可能だと思われる。偏った見方になるのかもしれないが、森林認証を受けている森林というだけで、売りになる。森林浴は既に私は個人的にはお金を出しても行きたいなと思うところではある。森林認証を受けた森林は、様々に配慮された経営がなされている。心が洗われる森林だなと思うので、そういうのが既に金勝山でもできつつあると私は思っている。

加藤副委員長：こんぜの里は、すでに施設が立地しているというところが強みだと思われる。

（3）こんぜの里周辺エリアの施設に関する整理

（4）こんぜの里周辺エリアの施設に関する課題整理

（5）こんぜの里周辺エリアの方向性検討

・事務局より資料説明を行い、こんぜの里周辺エリアの方向性に関する委員の意見を頂戴した。

・以下、主な意見。

高橋委員長：非常に広範囲にわたる施設に関して、方向性の一種のたたき台、基礎となる案を示していただいたと認識している。施設を改善するというか、全体としてどうしていくかという、わりと大きなところで方向性を出させていただくというのが今回の委員会の目的だと認識している。

澤委員　　：フォレストアドベンチャーの利用者に意見を聞くと、フォレストアドベンチャーで遊ぶ時間は大体 2 時間、多くて 2 時間半、1 時間弱で終わる人もいるが、その後行くところがないため、信楽に行くケースがほとんどであるようだ。いかに滞在させるか、次に何があるのか案内できていない。なかなか単体の施設では困難なため、施設間で連携してほしいといつも言っているが、まだそれは実現していない。

田中委員　：もともとこの地域をどのように捉え、その中で各施設をどうしていくべきか最初からまとめているところに違和感がある。よくまとめられており、ここに書いてあるのはもっともなことが書いてある。しかし、それでいいのかという違和感がある。また、コンセプトイメージ、「森に学び　森で過ごす　森のゲートウェイ　こんぜの里」、は誰が決めたのか。上手にまとめてはあるが、まとまりすぎ。検討段階で我々に振っていただいて、もう少し我々も検討するような進め方ができないかというこ

とは率直な意見として思っている。

高橋委員長：私の理解では、事務局にて考えて作られた素案と理解している。これはあくまでもたたき台素案ということなので、これを守らなければいけないとは理解していないのですが、それでよろしいか。

事務局　　：認識の通りである。

高橋委員長：あくまでこれはたたき台で、どうしてもそこに制約されるというのは確かにあると思いますが、もうちょっと別の要素というか、もっと変えるというはあっていいのではないかと考えている。

意見募集表も用意されているため、そちらに意見を出すこともできる。確かに公的な機関の委員会というのはスケジュールが決まっていて、年度に終わらせなければいけないというのでこういう形になることが多いが、委員の方も非常に精通した方々ばかりであるし、実質的な議論ができればと考えている。

吉永委員　：道の駅で倉庫が不足しているとは、備蓄倉庫のことか。

事務局　　：道の駅こんぜの里りっとうは施設の規模自体が小さいので、商品をしまう倉庫が小さいという指定管理者さんからの意見である。

吉永委員　：現在の道の駅は、マイクロバスが 1 台入ると店の中の売店がいっぱいになってしまう。もう少しゆとりがあったほうがいいかなと思う。

それから、眺望を確保するための伐採という作業も活性化を求めるためには必要な作業となるのではないか。

高橋委員長：現状分析では、県外のお客が少ないとか、消費額が少ないとか、外国人も少ないということで、地域外へのアピールが少ないというところが地域の問題として挙げられているので、そこから流れとしてはもっと地域外から呼んでくるとか、外国人のお客を呼んでくるとかいう方向性が出てくるのかなと思ったら、そうではないので、私としては、これから 10 年先、20 年先を目指す上では、現状改善を積み重ねていくというのでいいのかなという疑問を持った。

地域活性化をするには若い人に住んでもらう。若い人に住んでもらうためにはそれなりに高い給料を払う必要がある。そのためには高付加価値の観光をしなくてはいけないということなので、どこも高付加価値の観光にしたいと言っているので、それとも競争になってしまうかもしれないので、それを追い求めることがいいのかどうかわからないが、そういう大きな方向性を出さないと、なかなか地域振興にはつながらないのではないか。

また、民間に投資してもらうためには、民間がそれなりに儲けることが出来なければ来てもらえない。それなりに滞在して、こんぜの魅力を十分に満喫してもらう、そういう大きな方向性が入っているべきではないかと私はこれまでの話の流れを聞いていて思ったところである。

玉木委員　：こんぜの山を味わってもらうために滞在時間を増やす仕掛けとして、林道、あるいは我々の作業道とかでも結構山を周回することができるので、1 時間コース、2 時間コース等の複数のコースを提供できればよいのではないか。

高橋委員長：どうしても観光は観光、林業は林業というふうに考えてしまうが、林業と観光を結

びつけるという新たな方向性が1つの案として出てきて、非常に私はよいと思う。

加藤副委員長：コンセプトの話は議論にもなっていたかと思うが、ほかの周辺施設の動向とか、そこら辺も含めて考えると、こんぜの里ならではの強みというのが何であるのかと考えていたが、そういったところから方向性がでてくるとコンセプトになってくるのではないだろうか。

高橋委員長：この委員会として民間になるべく任せるということだが、ある意味こういう公の財産を民間に任せるというのは非常に議論を呼ぶところもあると思う。だから、民間に任せて、うまくいけばとてもうまくいくけれど、コントロールが効かなくなるとか、そういうことも考えられるため、どういう線引き（公と民の線引き）をするのかという点について、事務局はどのように考えているのか。その辺はある程度何か考えたほうがいいのか、今市役所として何か考えておられるのか、そこら辺を教えていただきたい。

事務局　：この4施設につきましては、ご存じのとおり指定管理制度を用いて運用している。この制度が、民間事業者にとっては足かせになるわけである。今後、民間事業者に施設自体を委ねていこうとする中でと、民間の自由にされてしまったら、本来あるべき山の機能や、当初の設置目的から逸脱した利用をされてしまうのではないか等の懸念も当然あろうかと思う。

ここにつきましては、今現在、私どもがこうやれば大丈夫だというような何か妙案を持っているというわけではない。しかしながら、我々も当然考えていかなければならないところであり、指定管理制度を継続しながらの民間導入や、施設の譲渡を検討する際に、何らかの条件付けをした上での譲渡であるとか、そういったことにつきましては基本的には今ある山の機能を生かせるような形での運用をお願いするということを原則に民間へ委ねていきたいと考えている。

事務局　：市長はもう少し前向いた考え方をされているが、施設全体を民間事業者に委ねてしまうと、都市計画法や条例などの規制がかかってしまう。そのため、この委員会として最終的にこんぜの里周辺をすべて民間の力も借りながら魅力発信に努めていこうという方向性となった場合には、我々が規制緩和に取り組まなければならないと認識している。ただし時間をかけてやるものではなく、上位計画からあらゆる計画を変えていかなければならない。

先ほど、馬車の話も出されたが、市長としてもJRAの引退馬を活用するという話をしている。実はJRAの引退馬というのは、ほとんどJRAを引退すると地方に行き、地方競馬より引退馬が来る。例えば北海道のばんえい競馬の馬であれば馬車というので引くということは可能である。

実は、高島市のピックランドもきれいな景色だけ写真に撮り帰られるという状況があり、高島市の森林組合が馬車道を整備し、そこを栗東の引退馬を活用するといった事業が進んでいる。しかし、様々な規制への対応に苦慮しているようである。このように私どもも民間事業者に委ねようとするとどうしても法律の規制がかかるため、これらを解決していかなければならないと認識している。

高橋委員長：本会議の結果をもとにして、民間に出していくとか、規制緩和をするという方向に

なればよいと考えている。

吉永委員　：森の未来館に栗東市内の小学生が日帰りの研修で使っているが、それ以外に県内の学校が利用したりはしているのか。

事務局　　：草津、守山から、少数ではあるのですが、来ていただいている。

吉永委員　：森の未来館の館長はユニークなことをやったりして、子どもの気を引くようなことを積極的にやっており、管理している人の個性もアピールするというのも一つである。

事務局　　：実は森の未来館は、以前は最大で 44 校が利用していた。しかしながら大半は日帰りであり、山の水源涵養という機能を子どもたちに間伐体験をしながら見せようとすると、日帰りでは無理であった。そのため、宿泊を前提としたことにより、10 数校に減ってしまったが、1 泊することで、森林の施業について体験してもらいと考えている。

田中委員　：こんぜの里周辺には、平谷球場がある。スポーツ協会もこの中に入ってもらうなど、こんぜの里周辺の在り方について一括して集約してもらいたい。今後何をするにしても、3 課が集まってやるということになってくると大変であり、スムーズに事が運ぶようなことを考えていただきたい。

８．その他

（１）次回の会議日程について

（２）連絡事項

・事務局より次回の策定委員会の予定について説明を行った。

９．閉会